

7章 おわりに

本書は、水循環基本法の制定を受け、「水循環解析の社会実装の促進が可及的速やかに求められている」との認識のもと、平成 24 年度～平成 26 年度に実施した鳥取県千代川流域²⁾及び福井県九頭竜川流域（下荒井堰上流部）における水循環解析のケーススタディ^{1)、7)}で得られた知見を再構成し、地方公共団体等が水循環解析を実施する際に参考と出来る技術図書とすることを目的としてまとめたものである。

1 章で述べたとおり、水循環解析は、対象となる流域の地形・地質が複雑な場合や、モデルを設定するために必要な資料が十分には入手出来なかった場合など、水循環解析に期待する精度が得られない場合も想定される。そのような場合は、資料・データの不足やパラメータのチューニングの不足等、精度が得られなかった理由を十分に考察し、今後の観測体制や解析に反映させ、長期的な視点からモデルの構築を行うことも重要と言える。

なお、水循環解析は、現状では、解析事例が必ずしも多くなく、水循環解析の活用手法が十分に定まっていない。今後、各機関が水循環解析を行う際には、挑戦的に様々な活用を試みることで、事例を蓄積・公表し、活用手法の更なる確立に資することが期待される。

また、水循環解析は、流線軌跡図や河川からの湧出量等の様々な出力が可能であるが、検証データが不足するため、精度検証が必ずしも十分でない。今後、モデル流域の設定による様々な観測データの蓄積・公開等により、モデルの精度検証がなされるとともに、後発のモデル開発に資することも期待される。